

〔常山紀談<sup>十</sup>〕朝鮮の平安川は、略中諸家の士、或は七八町、十町、或は十二三町あらんといへども、審ならず、黒田長政の士、吉田六郎大夫、略註又助父子に見積り候へと下知せらる、略中翌朝又助組の士を引具し、川岸に出川の向に朝鮮人三人見えたり、又助小柳權七は長高き者なり、あの向の人退かざる内に急ぎ堤の上を行べし、指物をふる時踏とまれと言含め、權七走り行其たけ向の人とひとしく見ゆる時、指物を振たれば立どまりぬ、即其間を打てみれば八町五段なり、長政聞て、又助二十一歳、老功の者にも劣らじと稱美せられけり、

〔東照宮御實紀附録<sup>八</sup>〕慶長四年九月九日、重陽の佳儀として、坂城にまうのぼらせ玉ひしが、○徳康城中には兼て異圖あるよし群議まち／＼なれば、本多中務少輔忠勝、井伊兵部少輔直政はじめ、宗徒の人々十二人、いづれも用心して供奉せり、○中還らせ玉ふ折から、わざと厨所の方へ廻らせ給ひ、一間四方の大灯のかけたるを見そなはし、是は外になき珍らしき物なり、わが供の田舎者どもにも見せ度と有て、酒井與七郎忠利をもて、御供のもの悉く召よばれて見せしめられ、内玄關よりまづかにかまでさせ給ひしなり、

〔常山紀談<sup>十一</sup>〕直江兼續、慳窩藤歛夫に對面せんといへども、聞入られず、兼續おして行たれば不在なり、度々招けども行ざるに、今日來りたるにも逢ず、僞て他に出たるとや思はんとて、直江が許に行れしに、直江其日關東に赴きしかば、跡を追て、大津に至て對面あり、直江廢れたる家を急に取立る時、人臣の心得いかにと問、慳窩事を速にせんとせば、却て敗る、基なりとぞ答へける、後に直江、景勝に進めて旗を揚させ、必家を滅すべしと、慳窩いはれしが、果して景勝に事を起させたるが、其功ならざりき、

〔常山紀談<sup>十六</sup>〕上杉家の士大將杉原常陸は、智勇備はりたる人なり、東照宮宇都○都下恐の小山より、引返させ給ふ時、上杉家の軍兵ども、大にいさみあへりしに、杉原獨眉をひそめて、大敵に恐